

海國兵談第六卷 (現代語訳)

撰士及び一騎前

人は凡人であることが一番良いと思いがちであり、しかも人々が万芸に長ずるとい
うのも実現困難である。それでも得意とするところ一芸ずつはあるものだから、その
得意とするところを選んで、それぞれの職を授けるようにせよ。孝に五段階があり、
武にもまた五段階があるという心得で選ぶようにせよ。これこそ主将が第一に思慮
しなければならぬのであるが、無学であつてはその器量に応じて選ぶことも、上手
くないかぬものである。これを上手くやるには、多くの書を読んで日本やシナの才智
ある君主が、人の器を選んできた事例を考察すれば、誰が教えるともなく、人の器を
選ぶことが上手くなるものである。それゆえ君主たる者の第一の勤めは、多くの書を
読んで君主の武を知ることである。君主の武は平士の
武と同じではないそこで、人を選ぶ方法の大略を左
に記す。なお工夫を加えよ。

○様々なことを読み知っており、その内容をしっかりと覚えていて才智が逞しく、経済
に達し、弁舌の才に優れ、気骨のある者は、家老の職を任せよ。

○武勇を第一として、兵道に達し、才智ある者であれば、番頭に用いよ。

○勇壮にして、おとなしく、かつ物に動じない者であれば、武頭に用いよ。

○士卒の中で、日本やシナの書を読んで多くの物事を知っている者を選んで、一組と
なしておけ。

○頓智頓才にして弁舌に優れる者を選んで、一組となしておけ。

○兵道を心得ており、物見等で機転が利くような者を選んで、一組となしておけ。

○力が強くて勇気のある者を選んで、一組となしておけ。

○弓、鉄砲、弩弓等の上手な者を選んで、一組となしておけ。

○早道、はやわざ早業の者を選んで、一組となしておけ。

○天文、算数等の得意な者を選んで、一組となしておけ。

○水泳、水馬等の上手な者を選んで、一組となしておけ。

右の他にも、人を選ぶ基準には幾とおりもあるだろう。この類の者を全て平素から充実しておき、戦時には旗本は云うまでもなく、番頭にも配置して、肝要な用事に備えなければならない。

○総じて軍兵を選ぶ方法は、体格が逞しく一芸に長じ、意気盛んな者を上とする。技芸はなくても体格が逞しく意気盛んな者を中とする。技芸なく、体格も逞しくないけれども、意気勇壮な者は下の選別に充てよ。技芸なく、体格もすぐれず、意気もしぼんでいる者は取るに足らない。もしやむを得ずに用いるのであれば、火の番か飯炊きの類となるだろう。

右は全て、兵を選ぶことの概要である。

一騎前

○一騎前（＝各個の戦鬪）の趣旨は、敵に当たって勇壮であるのを専らとする。『呉子』に「進んで死するを以て栄と為し、退き生きるを辱と為す矣」とある。又、上杉謙信の書に「真精の鋒先は、鳴動の中に章疾」とある。又、同書に遮神剣という言葉がある。これは接戦の時は前懸りになって、自分の冑を敵の剣にまかせて飛び込め。そうすれば、軍神が敵の剣を遮って、我が身は無事であるという意味であり、真一文字に敵陣に飛び込むことを主とする教えである。これらを一騎武者の接戦における大主意と心得よ。さて、馬の乗形、物見の礼儀、武者詞、隠し字等のことは、一騎前の奥の

手にして枝葉末節なことなので、大略を知るだけで足りるだろう。左に基本となる要領について二、三を挙げるので、さらに考察せよ。

○六具と云うものに色々あるが、先ず一騎前の六具は、胴、胃、籠手、臙当、太刀、草鞋である。この他、大将の六具、身堅の六具、備の六具、番所の六具等がある。閑暇な時に学んでおくこと。

上述したように、六具に様々なものがあり、ことごとく六の数をを用いているが、これは「亀蔵六（＝足と頭と尾の六つを甲羅に隠す亀）」から出たこじつけに過ぎないので、厳格に六に限られたことの様に思うのは「柱に膠（＝規則などにとらわれて融通が利かないことの例え）」の類である。よって、私は一騎の六具に糲を加えて七具と教えるのである。

○身の廻りを具足で堅める手順は、下から始め、左を先、右を後とする。脱ぐときは上から始め、右を先にする。

○鎧の緘毛、甲冑の名称などは詳しいのに越したことはないが、大略を広く知っていればよい。その理由はこれらの事に拘泥すると、重要な方法を見失うことになりかねないからである。しかしながら、敵の容体を見覚えて、大将に報告するため、あるいは矢を射当て、又は負傷させようとするためであれば、右に述べたことを全く心得ていないのは、第一の不覚であると知れ。

○組討のために、時々相撲を取るのがよい。古代は角力と云って武芸の一つであり、武士の技芸を吟味する条件の中に相撲も含まれていた。もちろん諸国から相撲人として力持ちの人を進めさせた事も、諸史に見ることができだが、当世は歌舞伎と同じようなものになったことから、相撲は武士の芸ではないと思うのは不覚である。全て

組討は、高く組むのは弱く、低く組むのが良いと心得よ。

○組討では常に、素早く右手指を抜いて、組みながら突たいらけ。平忠度や山中鹿之助等の組み様を手本とせよ。

附 異国人と組討するのにいくつかの心得がある。先ず異国人に国々の差異があり、人の大小、力の強弱がそれぞれ異なる。琉球、タイ等の南人は皆、体格が短小で気力も弱い。支那も浙江、南京以外の人は琉球、タイ等の人に準ずる。又、山西、北京及び韃靼、朝鮮等の北地の人は、体格も大きくて、力も日本人より強い。ただ気性が鈍いだけである。ヨーロッパ人はただ身長が高いだけであり、さほど力もなく、気性も鈍い。さて、日本人と北地の異人等が角力するのを度々見たのであるが、四つに組んだならば北人は、後にも退かず、脇へも倒れず、ただ前にすかしてなで落とせば、うつ伏せに倒れてしまう。又、一つの心得がある。支那人の武芸は蹴ることを第一に習って、胸と膝とを蹴る。又、後跳ねを頻繁に行なう。又、拳法と云って握り拳こぶしで目を突くのである。この三つを心得ていて、蹴られず、跳ねられず、突かれないように、素早く身を寄せ付けるのを第一とせよ。これが支那人と組むときの心得である。

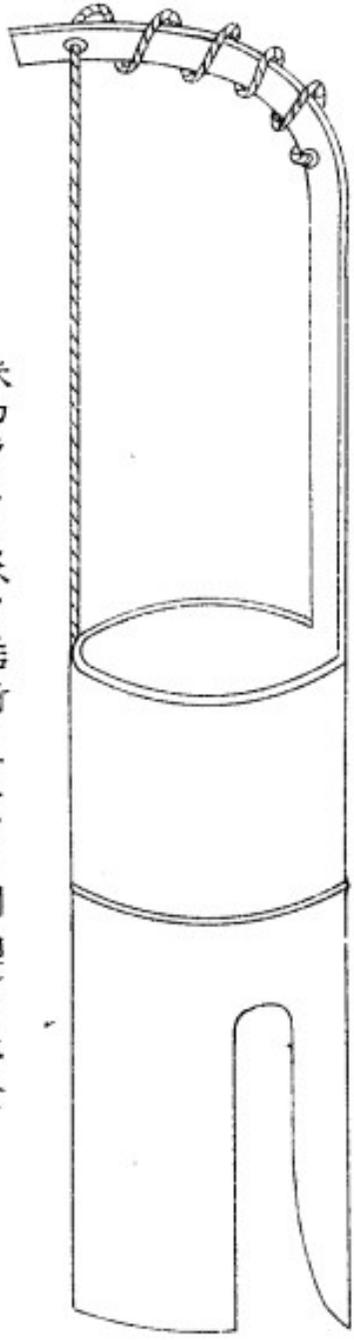
○武芸は定まりのないものであるから、何であれ一芸に熟達せよ。多芸に越したことはないが、多芸を心掛けると、熟達し難いことにもなる。しかしながら、太刀は人々が帯はかないということがない。それゆえ、太刀打ちだけは誰もが稽古しなければならぬ。中でも抜打ぬきうちに強くなることを重視する。これが太刀を学ぶ上での要法である。

○太刀帯たてはきにより着けている太刀は抜き難いものである。直に帯に挿さすほうが良い。この類のことは仕来りの式法にとらわれずに、自ら試みて便利なものを取ればよい。

○弓は半弓が便利であり、用いるのに勝れている。とりわけ馬上で有利である。もつとも突き通す力も強いものである。

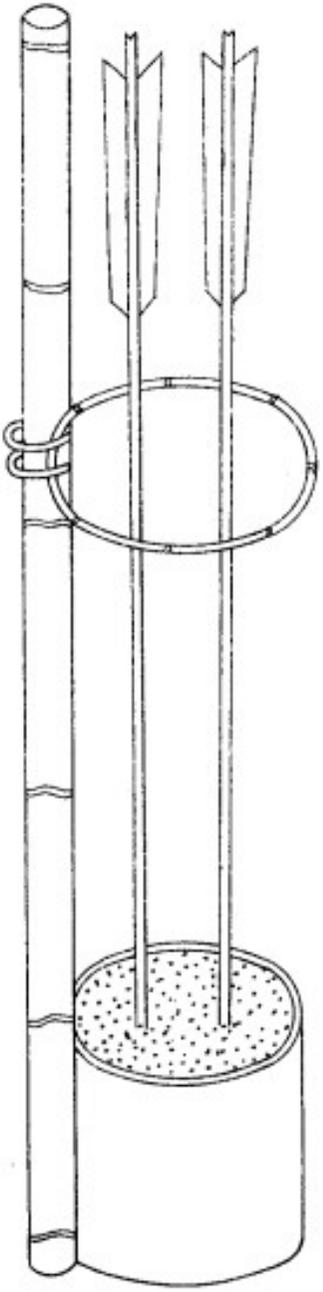
○矢籠しこに三種類ある。一つは平素用いているところの物である。一つは大竹を用いて図のようにこしらえよ。一つは小竹にて作成する。

コ、へ葉ヲ入テ根タマリトス



矢カラミノ糸ヲ拵竹ノサキヨリ引通シテ其余
リク下ヘ引ツリ置ヘシ矢ヲ拔ハ竹ハ子上リテ
糸シマル故残り矢抜落ス

根タマリハ桶箱竹筒ノ類或ハ
輪ヲ以テ平ククムヘシ



細竹ヲ輪ミシテ子チカヘシニスル故矢シマル之

○今の世の習いとして、足軽は皆、空穂（うつぼ）を用いているが、空穂を腰に付ける
と重くて動き難い。特に行軍する時などは大変疲れるものである。足軽が矢籠（しこ）を用い
て、戦（いくばく）に不便ということもないのであれば、動き易いように空穂に代えて矢籠を足
軽に用いさせるべきである。これは新たな制度のようであるが、戦に便利ならば、ど
うして新たな方法をはばかることがあるか。こちらを採用すべきである。

○桐油紙で長さ二尺（約六〇・六cm）程の袋をこしらえて、雨天時に矢籠（しこ）にかけよ。
もつとも、普段からかけておいても問題ない。

○重い鎧を好んではならない。美しく飾っている鎧は必ず重いものである。全で一騎
（各兵士）の出で立ちは、軽量化に努めよ。極端に略すれば胴（かぶと）と冑（かぶと）だけでも事足り
るものと思え。もちろん、冑も軽いものを用いるのである。鎖、鉢巻、あるいは半首（はつむり）
の類（しころ）で鍛様の物は、後ろを覆えば事足りるものである。大立て物等を用いるのは、
ほめられたことではないのだ。

○太刀は古くに作られたものを好んではならない。ただ丈夫なものを重視するの
である。戦時には、大平の世のように太刀、刀を玉のように、玩具同様に大切に取り扱
うものではない。ただ敵をたたきひしぐ鉄棒であると心得よ。

○帯太刀（はきたち）は長さを伸ばしたものを好まないこと。大体一尺八寸（約五四・五）五
七・六cm）から二尺（六〇・六cm）内外が良い。脇差も八寸九寸（約二四・二）二七・
三cm）から一尺（三〇・三cm）を用いよ。全ての太刀、刀は皆蛤刃（はまがひ）（はまがひ）切れ刃が蛤の貝
殻のようなふくらみを持たせて磨いである）に磨ぐこと。刃肉を落としてはならない。

○力量のある者は大太刀を用いることがある。帯（は）くのが難しい程大きな物は下人に
持たせ、又は背負うこともある。大太刀は力にまかせて、いくら大きな物でも用いよ。

○槍は穂先が三寸（約九・一cm）にして、柄は丈夫で短いのが良い。これ又、敵をた
たき倒す棒であると心得よ。現今、多くの流儀を立て、華麗に製作している槍などは、
戦場で用いればただ一打ちに打折（たひ）つてしまえ。武士たる者、本質を見失うな。

○全ての武器に自分の住国と姓名を漆で書き付けること。又、事が急であれば漆に代
えて墨でも良く、又小刀で彫り付けてもよい。

○馬はただ脚と爪の強さを重視する。五姓十毛の説、あるいは相生相剋の吟味、ある
いは旋毛（つじげ）、馬形等のことなどは、少しも拘ってはならない。しかしながら、手に余る
暴れ馬は、乗ることができないものと心得よ。

木火土金水の五行を立て、相生相剋を論ずるのは、支那を本家として、その他
は支那の弟子分である日本、朝鮮、タイ、琉球等の国々のみである。ムガール、
ペルシア、インド等の諸国は、地水火風の四行を立て、オランダ及びヨーロッパ
諸国は水火気土で四行を立てているように、これらの国々には四元行の説が
あって、五行の相剋はない。そうであれば、いくら論じてもさほど害もないも
のと思われるので、我々も表立った議論には五行の説によればよい。荒気なる
武用は、その説によらなくても全く問題がないだろう。

○気の弱い馬で水を渡るには、水際で早駆け四〜五回乗って、その気が衰えないうち
に渡らせればよい。

○歩いて急流を渡るには、三〜四十人が手に手を取り、組で渡るようにせよ。

○歩いて一人で渡るには、六〜七貫目（約二三〜二六kg）の石を片に担いで渡れ。

○沼を渡るには、葦簣（よしざ）^{よしざ}、竹簣の類を段々に打ち敷き、その上に物を置いて踏み渡れ。
さらに渡るに従って段々に先に繰りだすのである。

○草鞋、馬沓等の作り方も、人々が心得ておくべきことである。これを知らないのは落ち度である。

(頭注) 諸外国には草鞋がない。もしも外国で行動するのであれば、草鞋を多く貯えねばならない。○外国には藁はあるが、草鞋はない。自らの手で作るしかない。それゆえに草鞋、馬沓の作り方を知ることが武人のたしなみである。ただし、蝦夷国には藁もない。心得ておくこと。

○飯を炊くには、水一斗五升(約二七^リ)を沸かし、その中に米一斗(約一八^リ)を入れれば飯になる。又、鍋や釜がない時は芝の上に米を置き、水を注ぎかけて、再び上から芝くれを逆に打ちかけて、その上にて火を焚けば飯になる。又、米を水に浸して菰こもむしろの類に包み、浅く土中に埋めて、その上にて火を焚けば飯になる。又、米を水に浸して桶に入れ、ほどよい大きさの石を焼いて米の中に入れて飯になる。

又、洗米を布袋に入れ、青葉で厚く包み、焚き火の中に投げ入れて蒸せば飯になる。又、海水で飯を炊くには、釜の底に茶碗を伏せて置き、その上に米を入れて炊くべし。塩分は茶碗の中に凝るのである。

○水練の術を心得ていなければならない。知らない者は落ち度である。

○野陣、宿陣ともに自己の小屋に入るときは、四方を目で見える限りよく見ておくこと。そして寝るときは、どの方向を枕にして、どの方向を足にしているかをはっきりと心に覚えてから横臥すれば、不意の出来事に際して狼狽しないものである。かつ又、宿陣のときは、宿はずれと宿裏の方をも十分に見ておくこと。

○馬を縛り繋ぐやり方にいくつかある。一つは手綱で前足を縛っておく。一つは面繫おもがひ(くつわを固定するために、馬の頭にかける緒)を髪中に引き寄せておくのである。

○面や頬当てが無いとき、平素のように胃の緒を結べば、頤おとがひ(おとがひ下あごの先端部)が痛くなる。その時は下あごの適切な部位に真結びに結び止めて、その余りは常のよう

に結べばよい。

○板障泥を二枚合せにこしらえて、水汲みの道具として用いることがある。

※障泥あおり＝馬具の付属品、鞍橋くらぼねの四緒手に結び垂らして、馬の蹴り上げる泥を防ぐもの。

○鉄砲を脇側に懸けるには、筒先を下にして、左の肩から右の脇へ袈裟けさがけに掛けよ。突入時に肩の上から筒先を前に引き廻して敵陣に一発射放って、その煙の下から斬り込んだならば、一段と制圧効果のある突破口となるだろう。半弓を脇側に掛けるのであれば、直に弦によって掛けるようにせよ。ただし、弦の方を前にせよ。

○戦場へは竹筒に水を入れて胴脇や腰間に帯びるようにせよ。

○草鞋わらじは鷹野懸けで装着せよ。

○足が深く入ってしまう泥ねい地か、又は大雪などを渡るのであれば、櫛かんじきに乗れ。その形式に二つある。左図のとおり。



これは板カンジキである。板に緒を付けて、木履きぐつをはくようにするのである。

輪カンジキである。木枝を図のように曲げて真中に縄を懸け、これを足に着けるのである。



○水を渡るには、脛当すねあて、佩楯等はいだてを脱ぐことがある。

○接戦の場ではなくても、草鞋に中結びをせよ。

○松明たいまつは櫛ならの木が最も良い。又、乾いた細竹三〜四十本を束ね結んで用いるのも良

い。麻柄三〜四十本を束ね結ぶのも良い。

○物見についても大略を心得ていなければならぬ。物見については別の所に記してあるので、考え合わせてみよ。

戦場へ出る者の所持すべき品々

○胴服と云うものがある。厚綿の広袖羽織で、裏表ともに桐油布を用いよ。又、紙でもよい。これを鎧の上から着用すれば、寒さを防ぎ、雨をもしのぎ、又夜具の代わりにもすれば、重宝な物となるであろう。しかしながら、戦に臨んで急には製作し難い。平素の心掛けとして作っておくべきである。

○雨具は蓑笠とせよ。しかしながらこれは定められた方法であり、戦場ではどんな物でも手当たり次第、引つ被って雨を防ぐのである。ただし、雨を防ぐというのも行軍時のことである。接戦に至っては、大將士卒ともはずぶ濡れが常だと思え。

○弦巻は指添えの鞆に貫いて帯に結わえ付けよ。

○打替袋ほしいいに糲ほしいい五〜六合、乾味噌を少し入れて、常に腰間に帯び、肝要の時でなければ食べてはならない。(非常用糧食)

○二重廻りの手拭を腰に纏うこと。

○細引き一筋を腰に帯びよ。

○紙類はどこへ行くにせよ少々用意せよ。

○燧袋ひうちぶくろ、この中に気付け、血止め、艾よもぎ、虫薬、並びに馬薬等を用意しておくこと。

この袋は刀、脇差の栗形の所に結び付けるのである。さて又、甲冑を着けて大いに動くときは、蒸気が逆上して目眩めまいするものである。このような時は、辰砂益元散が甚だ良い。その製法は、滑石六匁なめし(二二・五g)、甘草、辰砂を各一匁もんめである。これらを

よく摺って細かい粉末にしたものを、水で飲む。この他、昔の武士の様子を見ると、負傷した時は、あるいは塩を摺り込み、又は直に灸をした事もあったそうだ。これ又、戦場での意気による一つの治療法なのである。

○軍中では時々大蒜にんにくを食べ、あるいは腰間に帯びておけ。よく寒さ、暑さや瘴氣れいき（熱病などを起こす悪気）を取り去る効果がある。

○扇子も必要と思えば用意せよ。

○麻紐にて長さ一尺二〜三寸（約三六・四〜約三九・三cm）の網をこしらえ、前後に緒を付けて腰間に帯びる。これを飯入れとして用いよ。

○錢百文ばかりを緒で貫き、腰間に帯びよ。

右が用具の大略である。さらに所持したい物品があれば、鞍しおでの四方手※、あるいは鐙あぶみ（＝馬具の一種）の下などを取付けて携行せよ。

※四方手とは、鞍の前輪しずわと後輪しずわの左右の四箇所につけた金物の輪を入れた紐。胸繫むながいと尻繫しりがいを留めるためのもの。

○全ての士卒等が心得るべきことがある。万一味方の大将が討死した時は、素早く死骸を背負って味方に引取らせて、その首を敵に渡さないようにせよ。もしも事が急であり、背負って味方に引取らせるのが難しい時は、ために忍ばざることなれども、素早くその首を討って、面の皮を剥ぎ、又は頭を微塵に切り砕くなどして、敵に得られて梟首てうくもんにされないように心掛けよ。昔から大将が討死した時、付き従う郎党共はことごとく討死するだけであり、首を隠すことをしなかったので、首を敵に得られて梟首てうくもんされたのであった。義貞が討死した時も、その首を深田の中に隠したけれども、その隠した者もまた立ち帰って義貞の死骸の側で切腹したことから、その足跡を辿って

終に首を得られて梟首されてしまった。たとい討死しても、梟首さえされなければ、討死の上の大慶と云うものである。よくよくこのことを思わねばならない。また、士卒郎党等の心得がある。義貞が討死した時の軍のように、無理な戦いや無謀な戦いになりそうであれば、強いて馬を牽き返して、詮無き討死を免れさせること、これも士卒郎党等のたしなむべき心得とせよ。

(頭註) 万一大将が討死したならば、近習の者がただ十人で死骸を取納めにかかって、じ余の人々は大將の復讐を報じようと愈々励んで斬りこめ。決してうろたえて敗軍することがないようにせよ。この趣意を全軍にしつかりと示しておくこと。ただし、取納め役の十人は兼ねてから役を定めて申合わせておけ。